

2026年6月15日

各 位

会 社 名 株 式 会 社 P R I S M B i o L a b
代 表 者 名 代 表 取 締 役 竹 原 大
(コード番号：206A 東証グロース市場)
問 合 せ 先 管 理 部 マ ネ ー ジ ャ ー 安 藤 幸 司
(TEL. 0466-53-8383)

「ラジオ NIKKEI ジャパンツアー」発表資料公開のお知らせ

平素より格別のご高配を賜り、誠にありがとうございます。

当社は、2026年6月13日（土）に、ラジオ NIKKEI ジャパンツアー「バイオ IR & 櫻井英明株式講演 in 大阪」に登壇いたしました。今回のセミナーでは、当社代表取締役の竹原より、当社の事業概要や研究開発の最新の進捗についてご説明し、投資家の皆様からのご質問にお答えいたしました。

当日使用した発表資料を添付しておりますので、この機会に皆様に広くご覧いただき、当社へのご理解を深めていただきたく存じます。

詳細につきましては、下記をご覧ください。

イベント概要

イベント名：ラジオ NIKKEI ジャパンツアー「バイオ IR & 櫻井英明株式講演 in 大阪」

開催日時：2026年6月13日（土）

主催：ラジオ NIKKEI

当社登壇者：竹原 大（PRISM BioLab 代表取締役）

タイトル：「PRISM BioLab（206A・東証グロース）IRセミナー」

※後日、放送（ラジオ NIKKEI/ラジコ）・ポッドキャスト配信予定

当社は、持続的な成長と企業価値の向上を目的として、株主及び投資家との対話を促進するなど、積極的な IR 活動を進めていきたいと考えております。今後も引き続き情報発信に努め、当社のことをご理解いただける機会の創出を目指した取組みを進めてまいります。

【株式会社 PRISM BioLab について】

当社は、独自に開発した α -ヘリックス・ β -ターン模倣技術を活用して、低分子化合物によるタンパク質間相互作用（PPI）を制御する新薬を創り出す企業です。当社は、従来困難であった細胞内で様々な信号を伝達する PPI を制御する独自のペプチド模倣技術である『PepMetics®』を構築し、ガンや線維症分野の臨床パイプラインを創出するとともに、国内外の多数の大手製薬会社と提携してこれまでに無い難病治療薬の創出に取り組んでいます。

詳しくは、当社ウェブサイト (<https://prismbiolab.com/ja/>) をご覧ください。

以 上



株式会社PRISM BioLab

(証券コード：206A)

ラジオNIKKEI ジャパンツアー

2026年6月13日



PRISM
BioLab

免責事項

本資料は、株式会社PRISM BioLab（以下「当社」といいます）の企業情報等の提供のみを目的として作成されたものであり、日本、米国その他の法域における当社の発行する株式その他の有価証券への勧誘を構成するものではありません。

当社は、本資料に含まれる情報または意見の公平性、正確性、完全性または正当性について、明示的または黙示的に表明または保証をするものではありませんので、これらに依拠することのないようお願いします。本資料の使用または内容等に関して生じたいかなる損害について、当社は一切の責任を負いません。また、本資料の内容は事前の通知なく大幅に変更されることがあります。

本資料には、当社の現在の見通し、予想、目標、計画などを含む将来に関する見通しが含まれています。このような将来に関する見通しは、当社が本資料の日付現在において入手可能な情報を踏まえた、当社の現在の前提及び見解に基づくものであり、経営陣による将来の業績の保証を表すものではありません。当社は、将来に関する見通しであることを示すために、全てではありませんが、多くの場合、「目的」、「予想」、「確信」、「継続」、「努力」、「想定」、「期待」、「予定」、「意図」、「する場合がある」、「計画」、「見込み」、「可能性」、「予測」、「リスク」、「努める」、「するべきである」、「目標」、「する予定である」等の語句およびこれと同様の意味を有する語句を用いています。また、戦略、計画または意図の議論においても将来に関する見通しが含まれます。これらの見通しは、将来の予想を議論し、戦略を特定し、経営成績または当社の財務状態の予測を含み、または当社の事業および業界、将来の事業戦略ならびに将来において当社が営業を行う環境に関する当社の現在における予想、想定、見積もりおよび予測に基づくその他の将来に関する情報を記載するものです。既知および未知のリスク、不確実性およびその他の要因により、当社の実際の業績は、将来に関する見通しに記載されまたは示唆されるものとは大幅に異なる可能性があります。当社は、これらの将来に関する見通しに記載される予想が正確なものであることを保証することはできません。当社は、本資料に記載される将来の見通しに関する記載を更新し公表する義務を負いません。

登壇者略歴



竹原 大 (たけはら だい)

1963年5月18日生 (63歳)

徳島県徳島市出身

略歴

1986年3月	京都大学工学部情報工学科 卒業
1986年4月	(株)リクルート 入社
1993年	Northwestern University, Kellogg School of Management (MBA)
1997年1月	(株)アドバンテッジパートナーズパートナー
1999年3月	(株)アドバンテッジリスクマネジメント 取締役
1999年6月	(株)長栄アドバンテッジ (現 (株)アドバンテッジリスクマネジメント) 代表取締役社長
2003年9月	(株)アドバンテッジリスクインシュアランスサービス (現 (株)アドバンテッジリスクマネジメント) 代表取締役副社長
2007年10月	ザイオソフト(株) 常務執行役員CFO兼社長室長
2008年1月	同社 取締役CFO
2011年5月	PRISM BioLab(株) (現 当社) 執行役員CFO
2012年12月	当社 取締役CFO
2016年2月	当社 代表取締役 (現任)

- 01 会社紹介・ビジネスモデル
- 02 PRISMの基盤技術「PepMetrics®テクノロジー」
- 03 進捗する臨床パイプライン
- 04 グローバル製薬企業との共同研究
- 05 PPI創薬を加速する2つの戦略
- 06 2026年9月期 中間会計期間 業績ハイライト

01 会社紹介・ビジネスモデル

02 P R I S Mの基盤技術「PepMetrics®テクノロジー」

03 進捗する臨床パイプライン

04 グローバル製薬企業との共同研究

05 P P I創薬を加速する2つの戦略

06 2026年9月期 中間会計期間 業績ハイライト

Purpose

PepMetrics®技術を活用して、だれもが希望に満ちた生活をするための新薬を創出します。

Mission

私たちは、自由な発想と積み重ねた技術で「あたらしい創薬」に挑戦し続けます。

Vision

「あたらしい研究」にチャレンジできる舞台に、
多様な才能が集い、
世界の創薬をリードします。

会社概要

(2026年3月31日現在)

会社名 株式会社PRISM BioLab (PRISM BioLab Co., Ltd.)

代表 竹原 大 (代表取締役)

事業内容 医薬品及び医薬部外品の研究開発及び開発製品の販売
バイオテクノロジーの研究開発及び開発製品の販売

創業 2006年11月

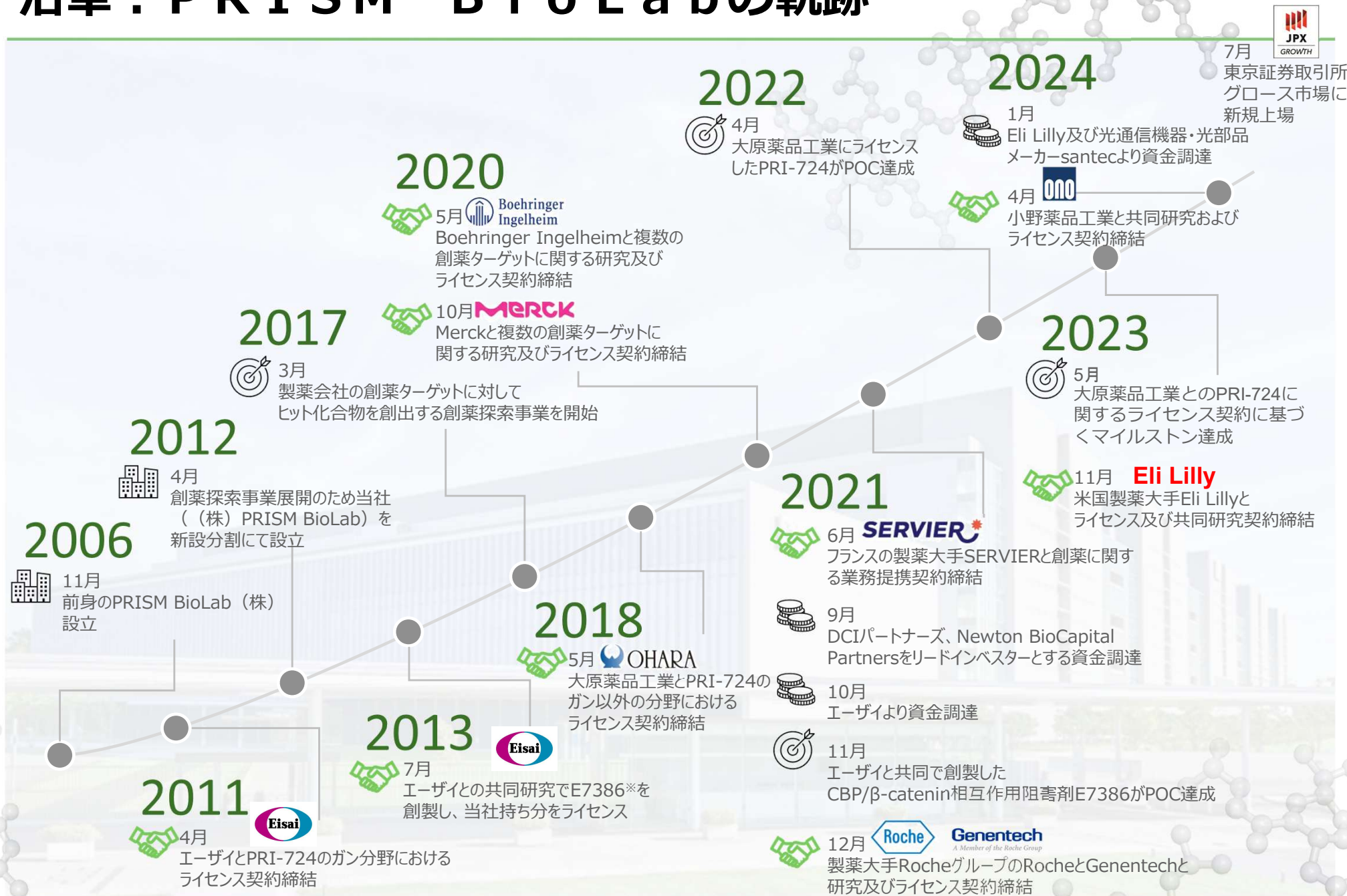
資本金 17億3,091万円

従業員数 40名

所在地
本社・研究所 神奈川県藤沢市村岡東二丁目26番地の1
湘南アイパーク

東京オフィス 東京都中央区日本橋本町三丁目11番5号
日本橋ライフサイエンスビルディング2

沿革：PRISM BioLabの軌跡

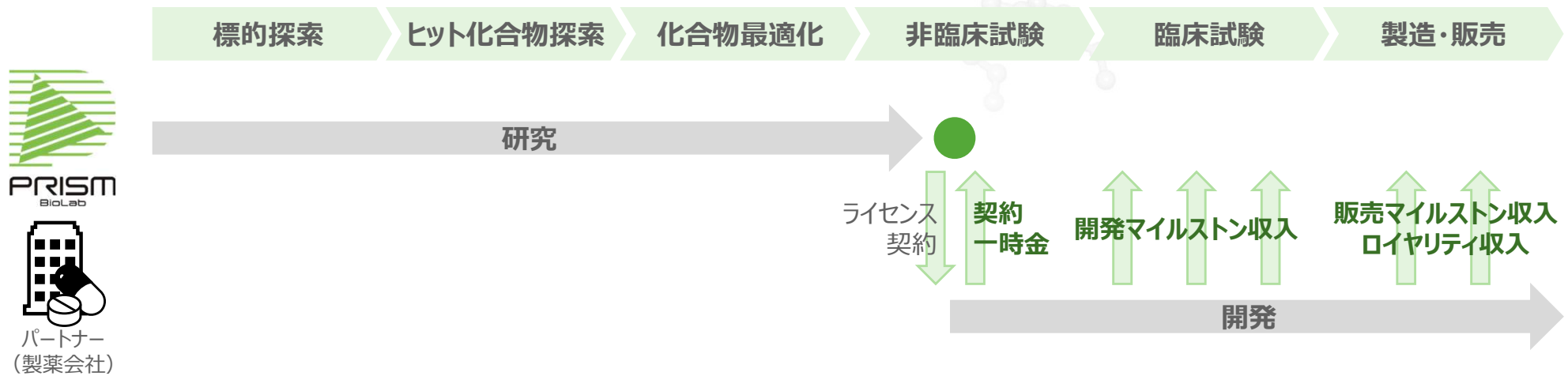


PP I 創薬を推進するビジネスモデル

PP I 創薬技術を基にした、自社開発事業と共同開発事業のハイブリッドモデル

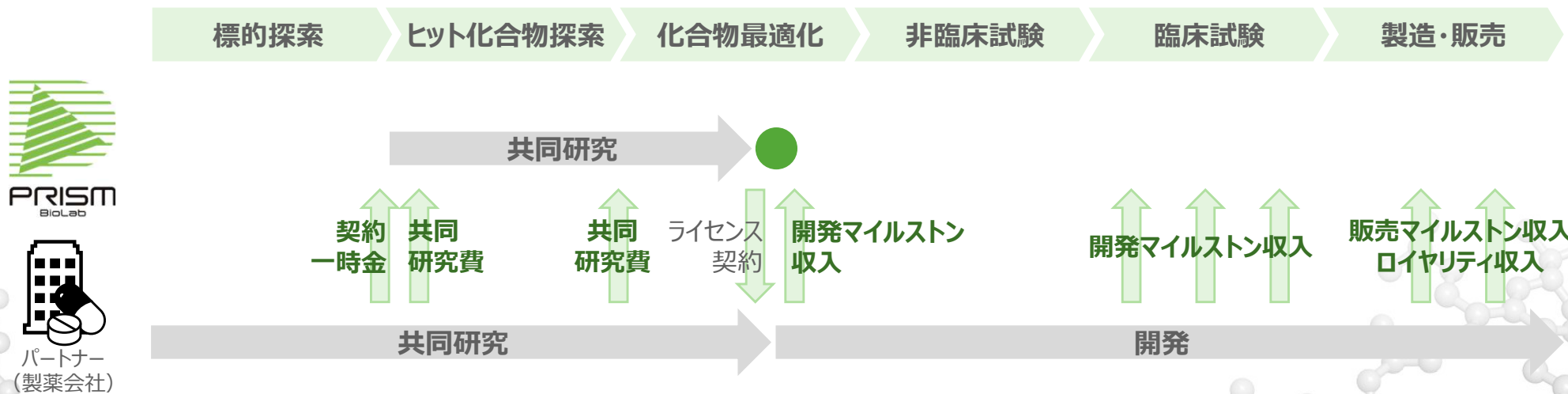
自社開発事業

自社で創薬標的を選定し臨床化合物を開発してライセンス



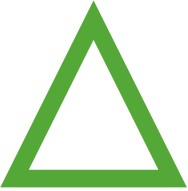
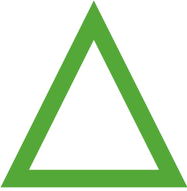
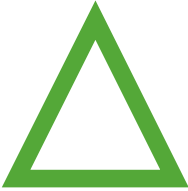

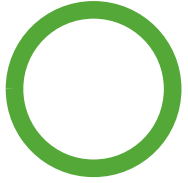
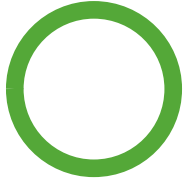

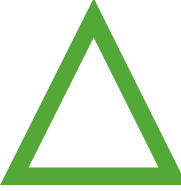
共同開発事業

パートナー（製薬会社）の創薬標的に対し、PepMetricsを活用して臨床化合物を探索してライセンス



PRISM BioLabの各事業の特徴

ハイブリッドモデルにより安定的かつ大きなリターンを目指す

	開発コスト	契約機会	収益タイミング	収益規模
自社開発事業 先行投資を伴うハイリスク、 ハイリターンなビジネスモデル	 ライセンスアウトまでの 資金は当社で負担、 開発リスクも伴う	 リソース（資金・人）によって 並行するプログラム数が 限られる	 ライセンスアウトまでは 収益化は見込めない	 ライセンスアウト後の 1件の契約総額は 大規模になる可能性
共同開発事業 安定的で早期収益化が 可能なビジネスモデル	 当社の資金やリスクは ほとんどかからない	 パートナーの資金で多くのプロ グラムを並行して 進めることが可能	 当初から収益化が見込める	 自社開発事業と 比較すると 1件の契約総額は小規模

01 会社紹介・ビジネスモデル

02 PRISMの基盤技術「PepMetrics®テクノロジー」

03 進捗する臨床パイプライン

04 グローバル企業との共同研究

05 P P I 創薬を加速する2つの戦略

06 2026年9月期 中間会計期間 業績ハイライト

PepMetricsがあたらしい創薬領域を創る可能性

タンパク質間
相互作用(P P I)
は有望な創薬標的

PepMetricsが
あたらしい
創薬領域を
創る可能性

PepMetricsは
ヘリックス構造を
高い精度で模倣

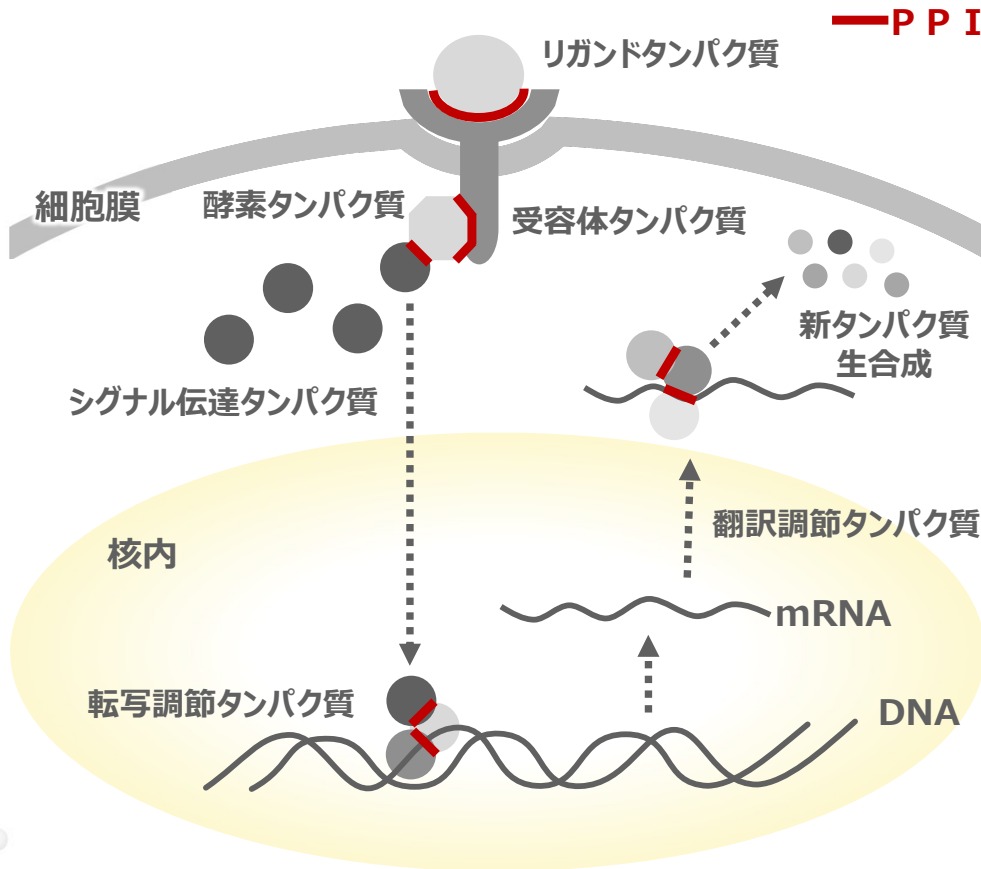
P P Iで
重要な役割を担う
ヘリックス構造

タンパク質間相互作用（以下「P P I」※）は有望な創薬標的

P P I は人体の発生、維持、疾患に深く関与し、重要な創薬標的となり得る

P P I は生命にとって重要な調節を担う

P P I は重要な創薬標的となり得る



P P I に関与するタンパク質（一例）	関連タンパク異常	関連する疾患の例
リガンドタンパク質	インスリン 欠乏	糖尿病
受容体タンパク質	成長ホルモン 過剰	先端巨大症
酵素タンパク質・シグナル伝達タンパク質	NTRK1 機能異常	疼痛
転写調節タンパク質	LDL受容体 機能異常	動脈硬化
翻訳調節タンパク質	リパーゼ 機能異常	高コレステロール血症
	APC 機能異常	大腸がん
	IRF5 増加	全身性エリテマトーデス
	Myc 増加	神経芽腫
	eIF4E 増加	難治性乳がん
	FMRP 機能異常	発達障害

※：インスリン、成長ホルモン、NTRK1、LDL受容体、リパーゼ、APC、IRF5、Myc、eIF4E、FMRP：これらすべて体内にあるタンパク質の一種

体内では健康を維持するため
様々なシグナル伝達のパスウェイに
P P I が関与している

P P I を創薬標的にする新規薬剤を創出できれば
多くの疾患領域に新たな治療アプローチを
提供できる可能性

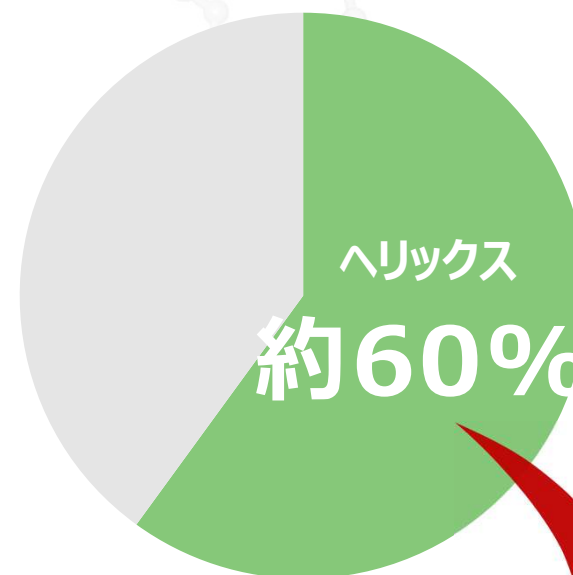
PP Iで重要な役割を担うヘリックス構造

PP Iにおいてヘリックス構造は重要な役割を担っている

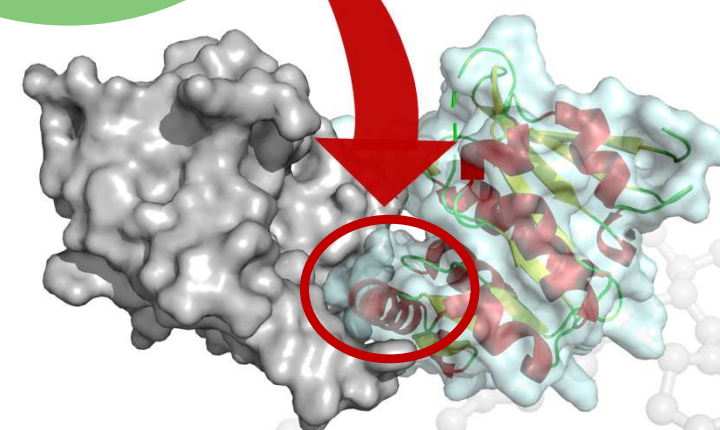
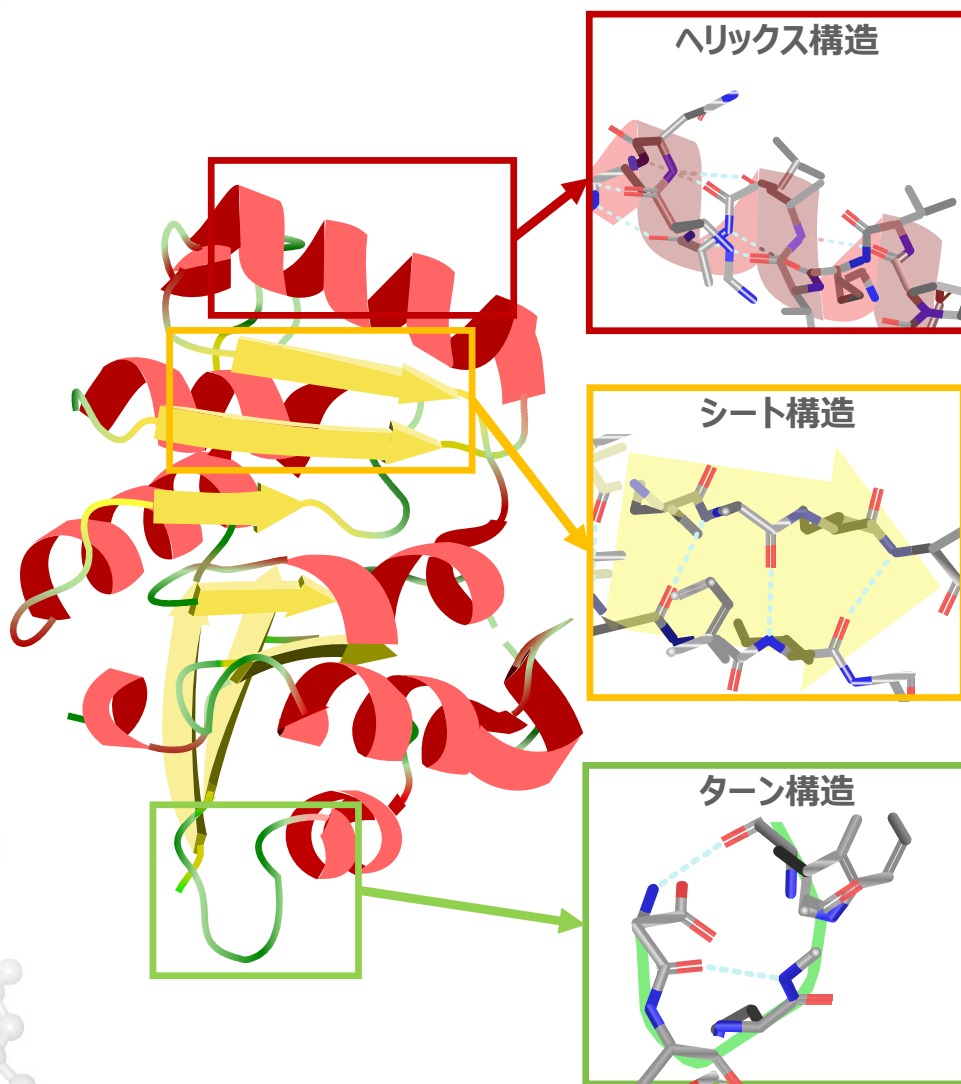
タンパク質は3種類の二次構造により構成

ヘリックスはPP Iの結合部位に多くみられる

PP Iへの結合関与割合※1



結合界面が
ヘリックス

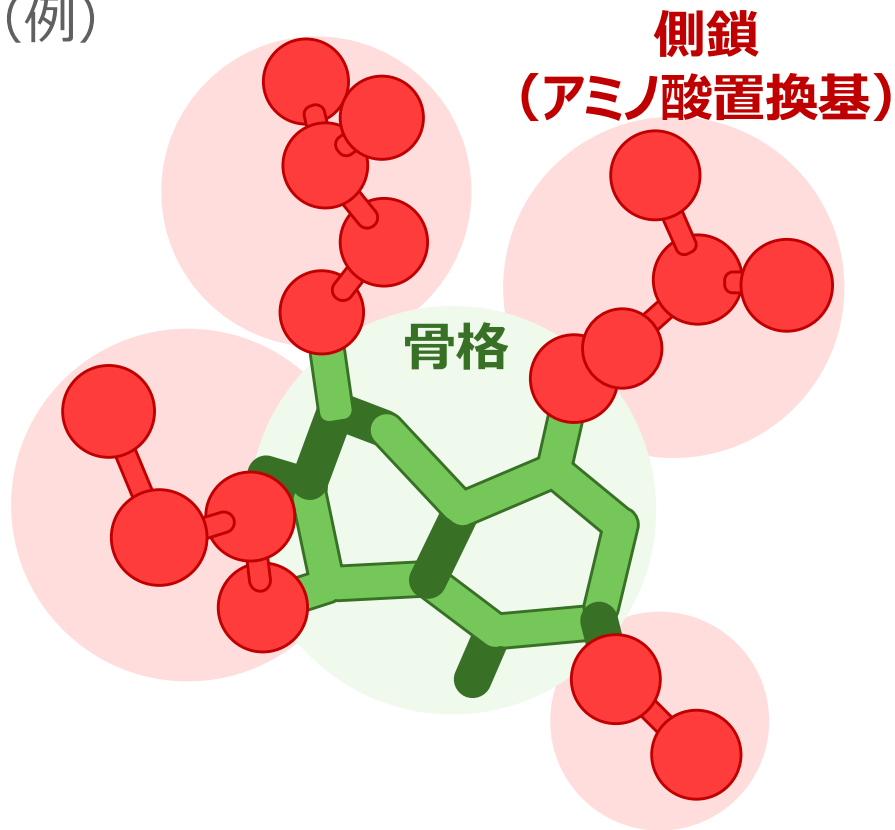


当社のプラットフォーム基盤技術「PepMetricsテクノロジー※」

PepMetricsは初めてヘリックス構造の模倣に成功した新たな P P I 制御モダリティ

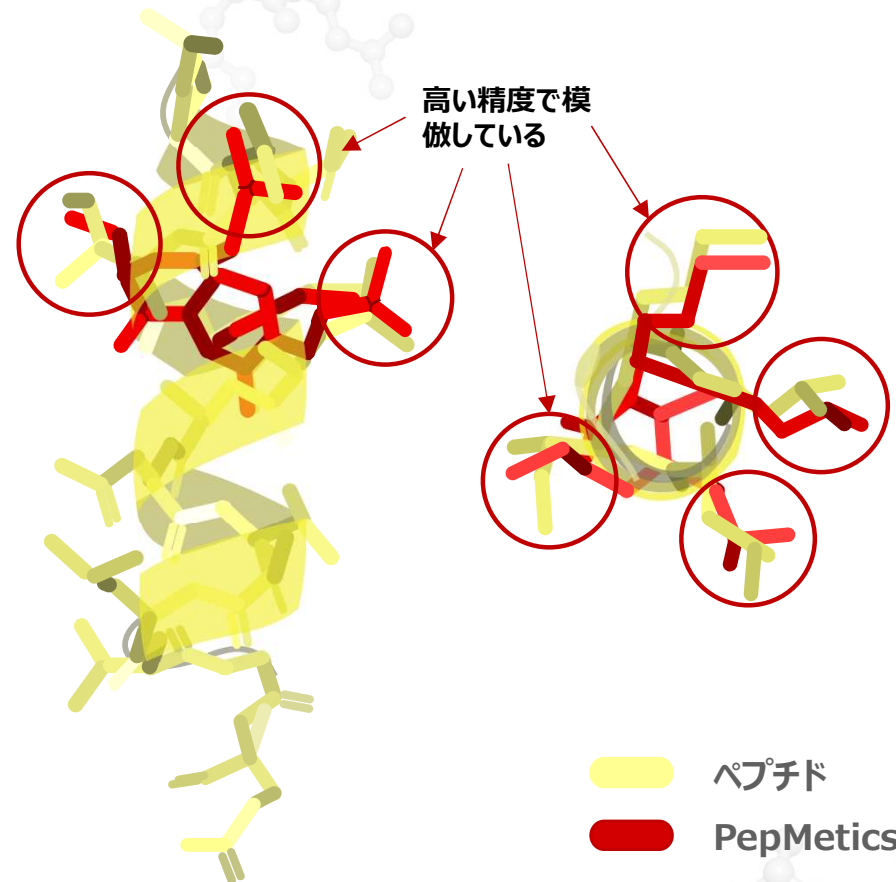
PepMetrics化合物の構造

(例)



PepMetrics化合物は
構造的にヘリックス構造を模倣する「骨格」と
様々に組み合わせられる「側鎖」で構成

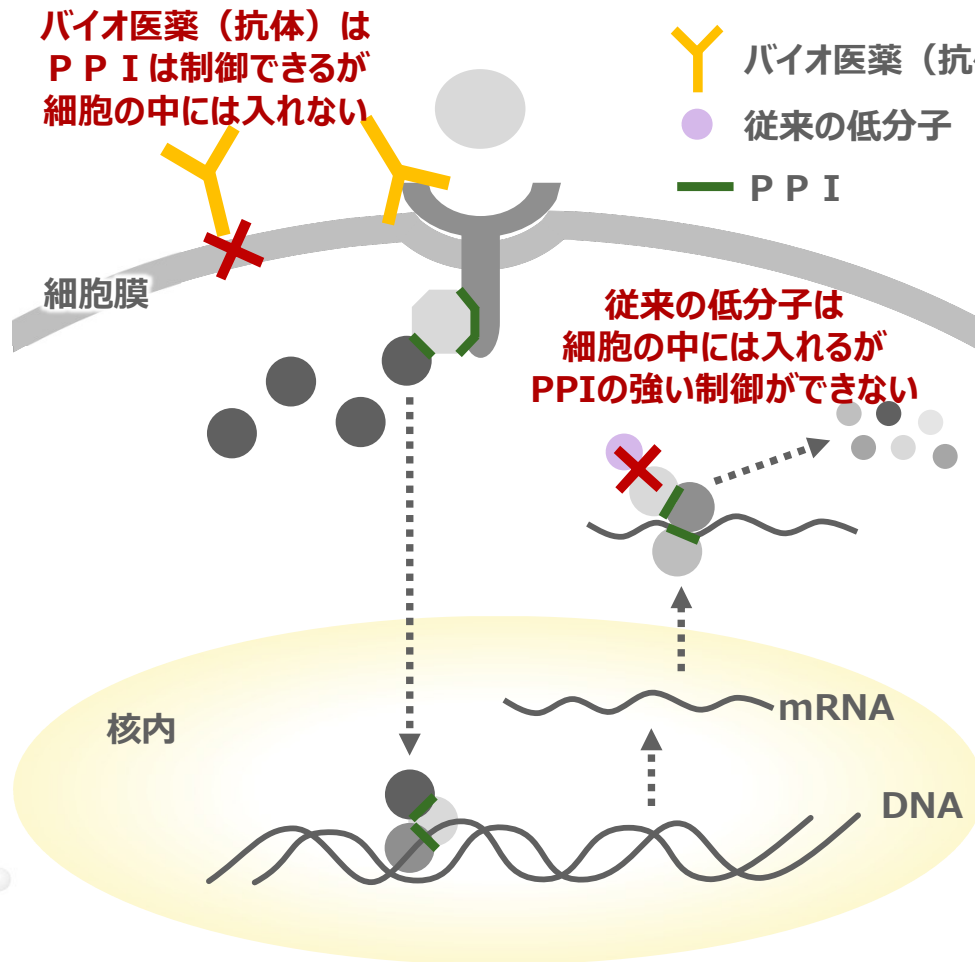
PepMetricsはヘリックス構造を高い精度で模倣



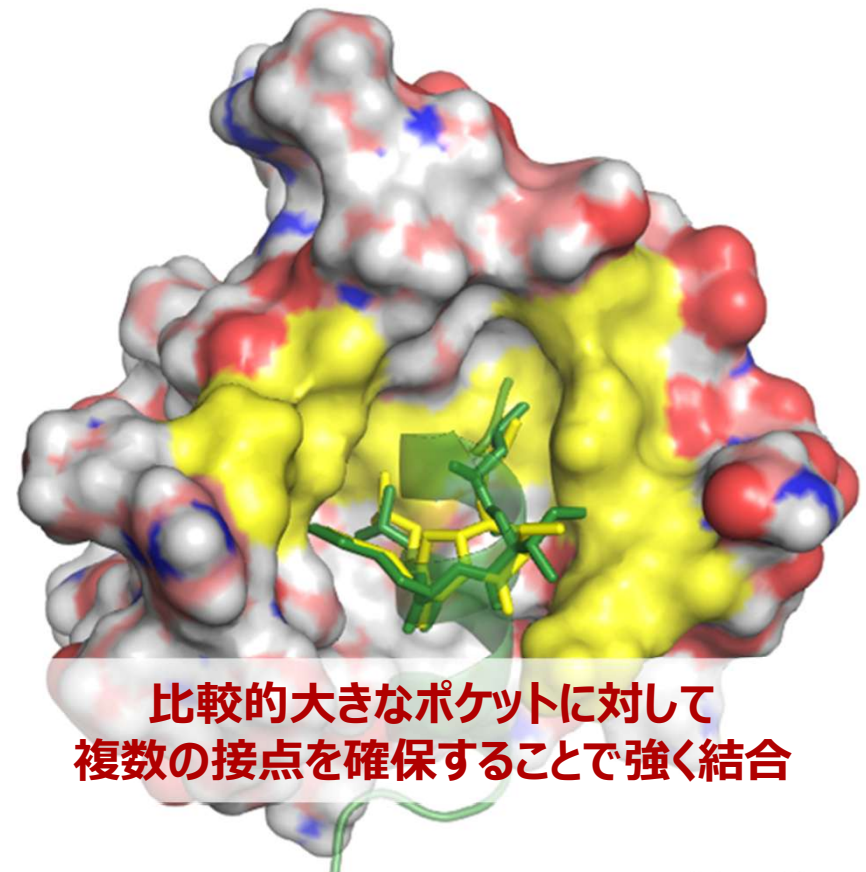
安定構造の骨格により
ヘリックス構造を高い精度で
模倣することが可能

「細胞内」 P P I をターゲットとする創薬の課題

細胞内 P P I をターゲットとする創薬では、従来の低分子では十分な阻害作用を発揮できず、バイオ医薬（抗体）では作用部位に到達できないことが課題



PepMetrics



PepMetricsは従来の低分子と同様に細胞の中に入り、かつ従来の低分子以上に P P I を阻害できる

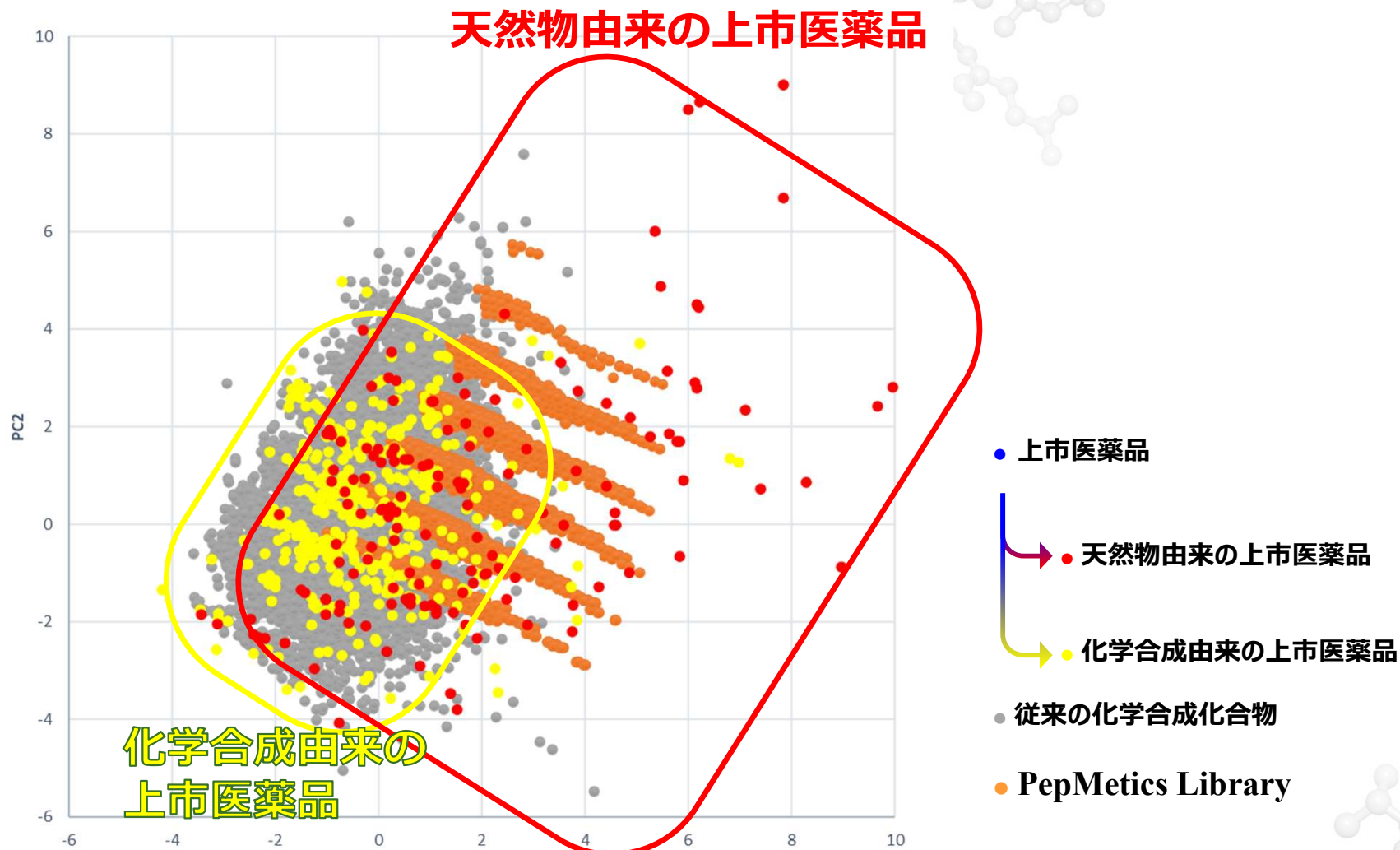
細胞内 P P I に対する他モダリティとの比較優位性

他のモダリティと比較しても「細胞内 P P I の制御」というコンセプトにおいて、PepMetrics®は画期的な創薬基盤

	細胞内移行性	P P I	選択性	安定性	剤形
 PepMetrics	細胞内移行可能	P P I 制御可能	選択性が高い	生体内酵素で分解されにくい	経口剤化可能
 抗体	細胞内移行不可	P P I 制御可能	選択性が高い	生体内で極めて安定	経口剤化不可
 ペプチド	細胞内移行限定的	P P I 制御可能	選択性が高い	生体内で分解される	経口剤化不可
 従来の低分子	細胞内移行可能	P P I 制御不可	選択性が低い (低選択性に起因する 毒性懸念あり)	生体内酵素で分解されにくい	経口剤化可能

天然物に類似する構造を有するPepMetrics®

化学合成では創薬が難しいとされる天然物由来の医薬品に重なる領域をPepMetrics®はカバー



PepMetricsは天然物に近い特徴を有しており、従来の合成化合物では創薬不可能とされてきた標的に対して多くのヒット化合物を創出

01 会社紹介・ビジネスモデル

02 P R I S Mの基盤技術「PepMetrics®テクノロジー」

03 進捗する臨床パイプライン

04 グローバル企業との共同研究

05 P P I創薬を加速する2つの戦略

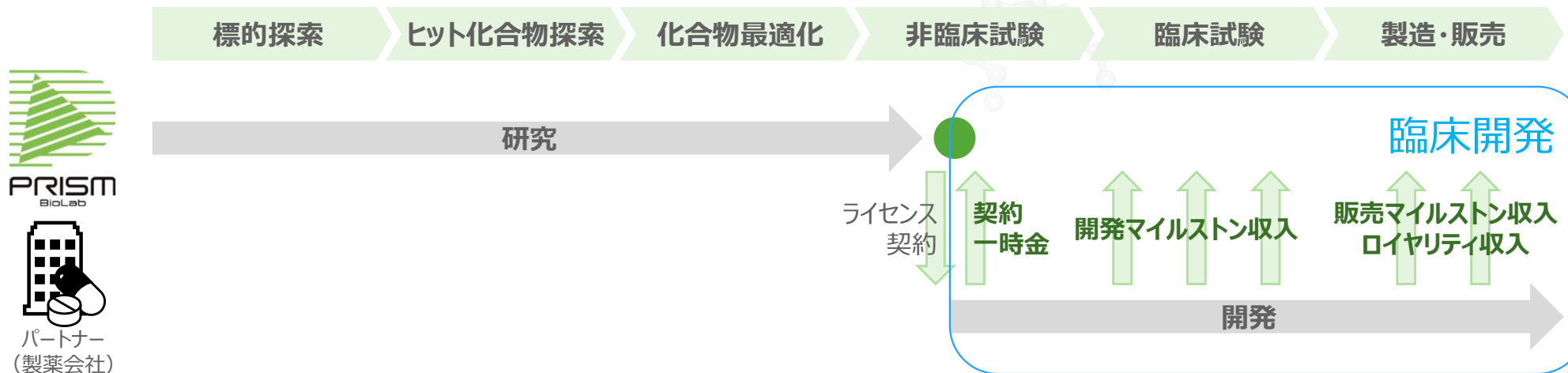
06 2026年9月期 中間会計期間 業績ハイライト

PP I 創薬を推進するビジネスモデル

PP I 創薬技術を基にした、自社開発事業と共同開発事業のハイブリッドモデル

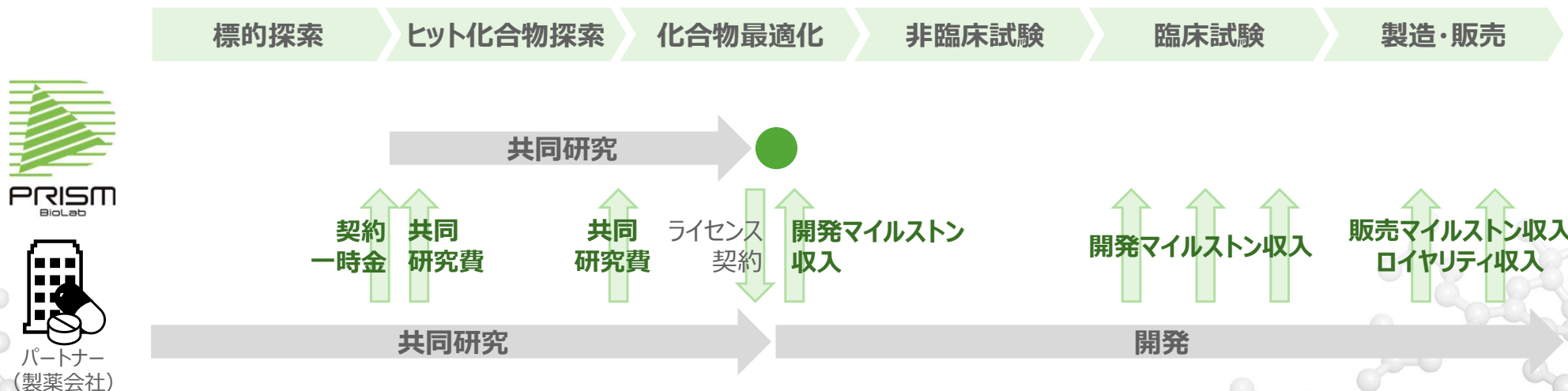
自社開発事業

自社で創薬標的を選定し臨床化合物を開発してライセンス





共同開発事業

パートナー（製薬会社）の創薬標的に対し、PepMetricsを活用して臨床化合物を探索してライセンス



自社開発事業

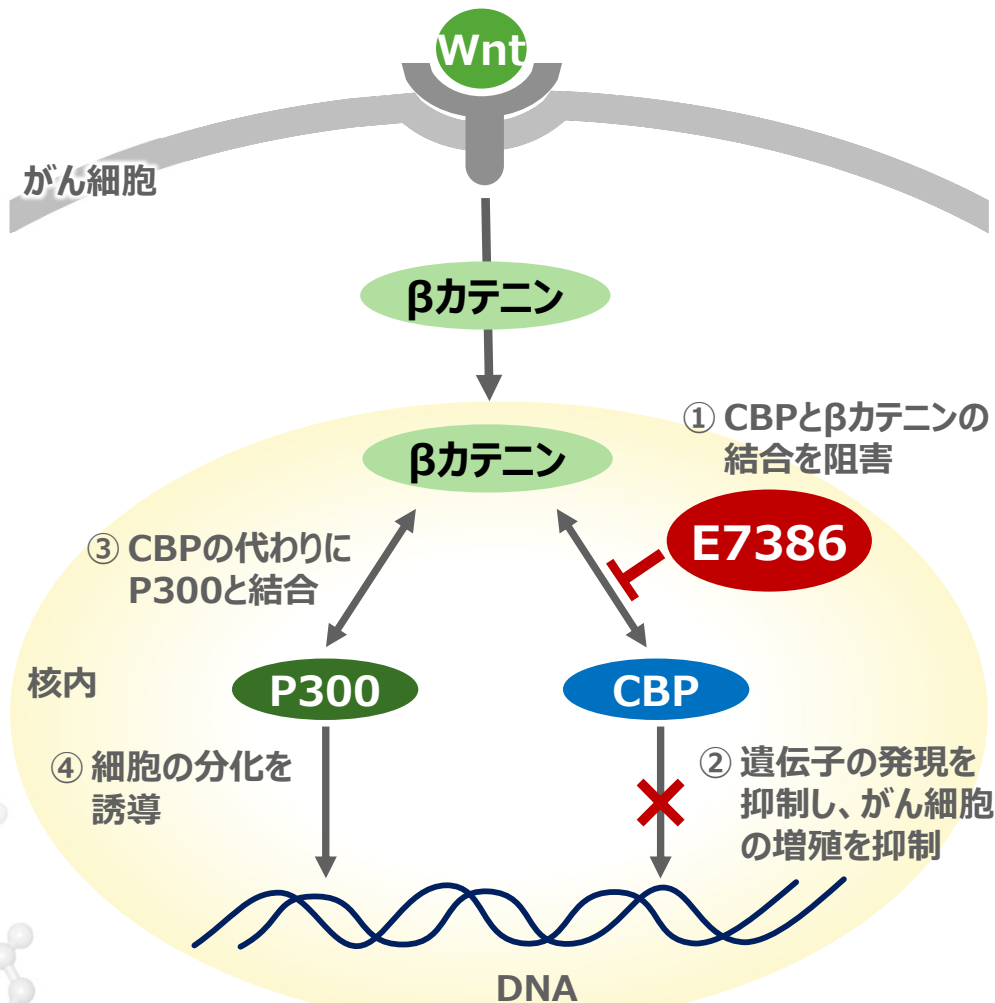
製薬企業 2 社に導出し、第 II 相臨床試験を進めている

提携先	開発品コード	契約締結年月	経済条件	契約内容及び進捗状況
	E7386 ^{※1}	2011年4月	<ul style="list-style-type: none">一時金、開発、販売等に対するマイルストーン及び研究費を含めて250億円以上ロイヤリティ：非開示	<ul style="list-style-type: none">対象製品に対するライセンス契約共同で創製した中分子化合物であるCREB-binding protein (CBP) /β-catenin (β-カテニン) 相互作用阻害剤 E7386 について、2021年11月に臨床における POCを達成エーザイ創製の経口チロシキナーゼ阻害剤「レンビマ[®]」との併用の臨床試験では、2025年10月にエーザイが欧州臨床腫瘍学会 (ESMO) で発表した後期第 I 相パートの最新の中間解析結果において、子宮内膜がんの患者で高い客観的奏効率と有望な予備的抗腫瘍活性が示された。管理可能な安全性プロファイルとともに、36.7%の全奏効率を示し、以前にレンビマ[®]投与歴の無い患者においては57.1%の全奏効率であった。エーザイは、子宮内膜がんの患者を対象とした第 II 相パートを進めており、2026年度中 (~2027年 3 月) にトプラインデータを取得し、「レンビマ[®]」との併用による子宮内膜がんに係る適応に関して、2031年 3 月までの承認取得をめざすと発表
	PRI-724 (OP-724 ^{※2})	2018年5月	<ul style="list-style-type: none">非開示	<ul style="list-style-type: none">当社の保有する特許権及び特許を受ける権利について、日本国内の専用実施権を許諾する契約2023年7月より、CBP/β-カテニン阻害薬OP-724のC型・B型肝炎ウイルスまたはMASH^{※3}に起因する非代償性肝硬変患者を対象とした第 II 相臨床試験を開始MASHを対象とするコホートでは患者の登録を完了

自社開発事業：E7386※1

E7386は第Ib相試験において腫瘍縮小効果を示した

E7386の作用機序



※1：E7386はエーザイと共同創製した化合物

※2：CR, complete response; dMMR, mismatch repair deficient; MMR, mismatch repair; NE, not evaluable; PD, progressive disease; pMMR, mismatch repair proficient; PR, partial response; SD, stable disease; RECIST, response evaluation criteria in solid tumors.

出所：European Society for Medical Oncology：(ESMO) 年次総会 (ESMO Congress 2025) ポスター発表 (2025年10月17日～10月22日)

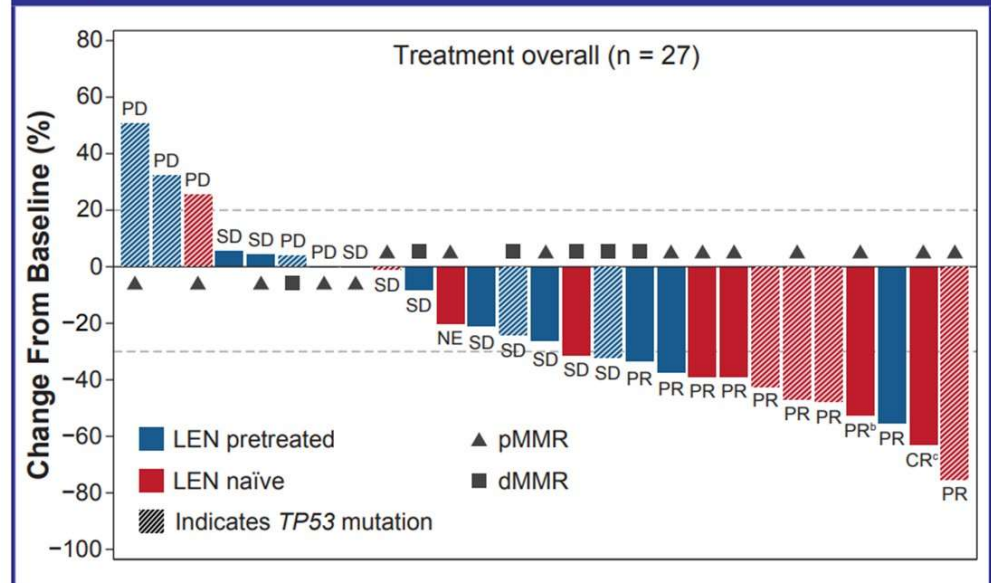
※3：本剤は、エーザイが創製し、エーザイと Merck & Co., Inc., Rahway, NJ, USA が提携契約のもと、共同開発および共同商業化を行っています

第Ib相試験の臨床試験データ※2

＜欧州臨床腫瘍学会 (ESMO2025) 発表概要＞ ※用量拡大パート
 CBP/β-catenin相互作用阻害剤E7386は、レンビマ®※3との併用療法による進行子宮内膜がんを対象とした第Ib相試験において効果を示した。
 (NCT04008797)

- ✓ 計画されていた 30名の患者の組み入れが完了し、管理可能な安全性プロファイルが示された。5名の患者への投与は現在進行中である。
- ✓ データカットオフ2025年6月4日の時点において、RECIST評価基準を用いて36.7%(11人)の全奏効率(腫瘍の大きさが 30%以上縮小)を示した。うち、以前にレンビマ®投与歴の無い患者においては57.1%の全奏効率であった。

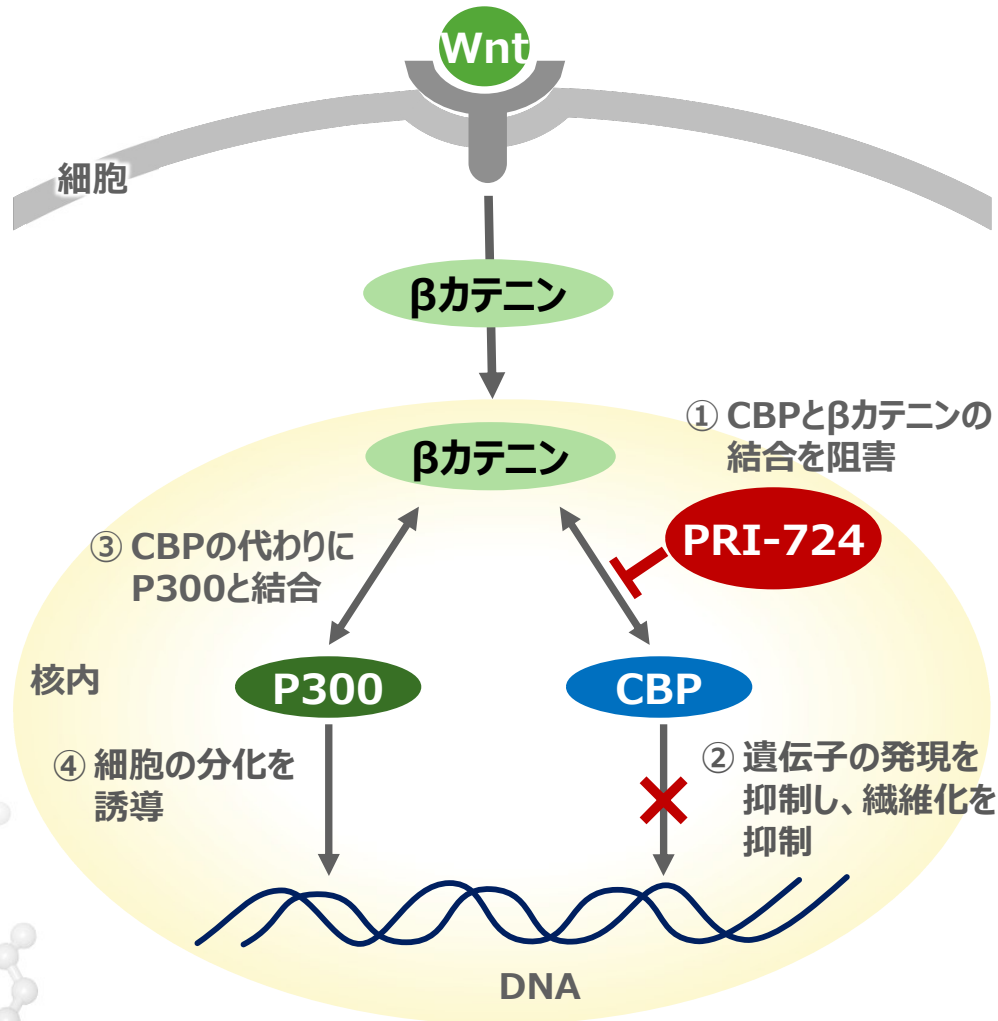
Figure 3. Changes in Sums of Diameters of Target Lesions^a



自社開発事業：PRI-724

PRI-724は第I/IIa相試験において肝硬変患者の肝硬度および肝機能を改善した（ヒトPOC達成）

PRI-724の作用機序

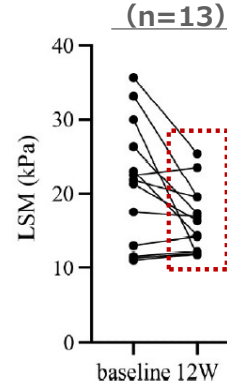


第I/IIa相試験の臨床試験データ

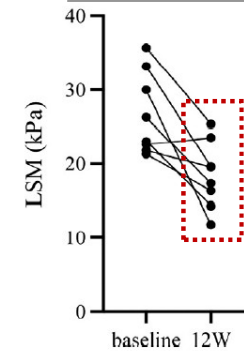
CBP/β-カテニン阻害薬PRI-724は、C型またはB型肝炎ウイルスに起因する肝硬変患者を対象とした第I/IIa相試験において、肝硬度および肝機能を改善した（NCT03620474）。

✓ PRI-724投与による肝硬度（LSM）：有意な改善が認められた。

投与患者のLSMの変化

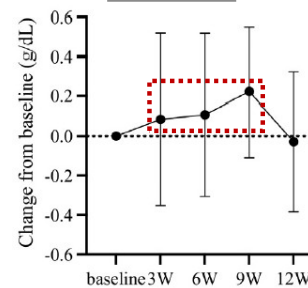


うち、LSM20kPa以上（重度）の患者の変化 (n=8)

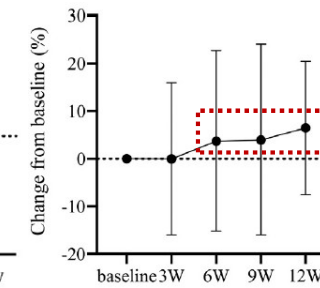


✓ PRI-724投与による肝機能：血清アルブミン値、総ビリルビン値及びプロトロンビン時間において、ベースラインに対する改善が認められた。

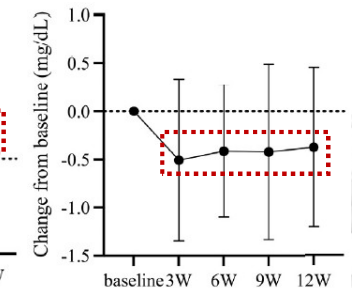
血清アルブミン値



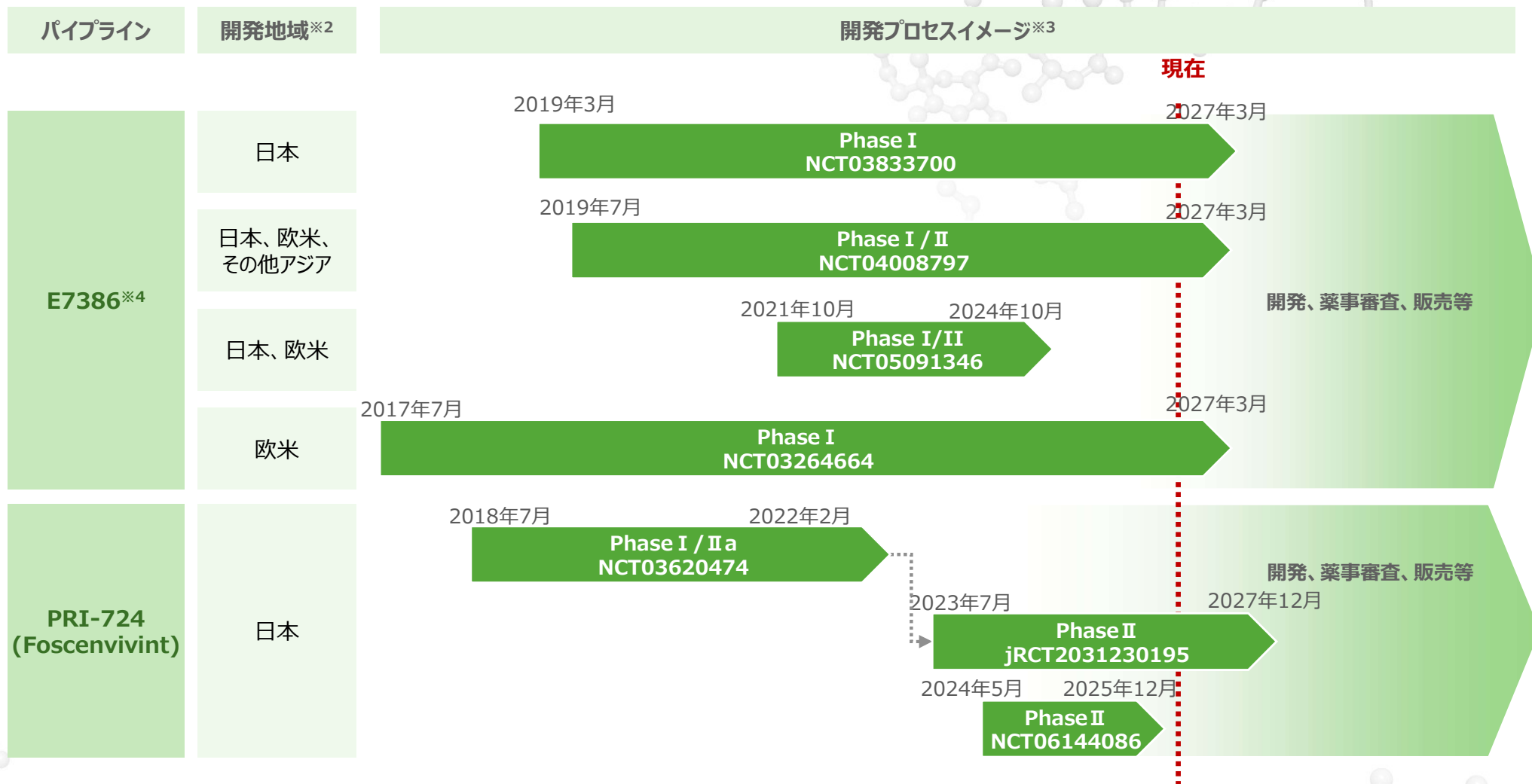
プロトロンビン時間



総ビリルビン値



臨床開発の進捗※1



※1：開発、販売地域はアライアンス先の開発・販売戦略毎に異なります。上記の情報には、現在入手可能な情報に基づく当社の判断による、将来に関する記述が含まれています。そのため、上記の情報は様々なりリスクや不確実性に左右され、実際の開発状況はこれらの見通しとは大きく異なる可能性があります。

導出された製品候補については、パートナーが今後の開発・商業化の第一義的な責任を負います。

※2：開発地域は当該臨床試験の実施国が属する地域を記載しております。情報は、2026年3月31日時点でのjRCT又はClinicalTrials.govに基づくものであり、変更になる可能性があります。

※3：開発プロセスイメージにおける臨床試験期間は、2026年3月31日時点でのjRCT又はClinicalTrials.govに基づくものであり、変更になる可能性があります。また、臨床試験期間は、当該臨床試験の開始日（予定日）・終了日（予定日）を参照しております。開始日について、症例登録開始日（予定日）、被験者登録組入日の開示がある場合は当該時期を開始日として参照しております。

01 会社紹介・ビジネスモデル

02 P R I S Mの基盤技術「PepMetrics®テクノロジー」

03 進捗する臨床パイプライン

04 グローバル企業との共同研究

05 P P I創薬を加速する2つの戦略

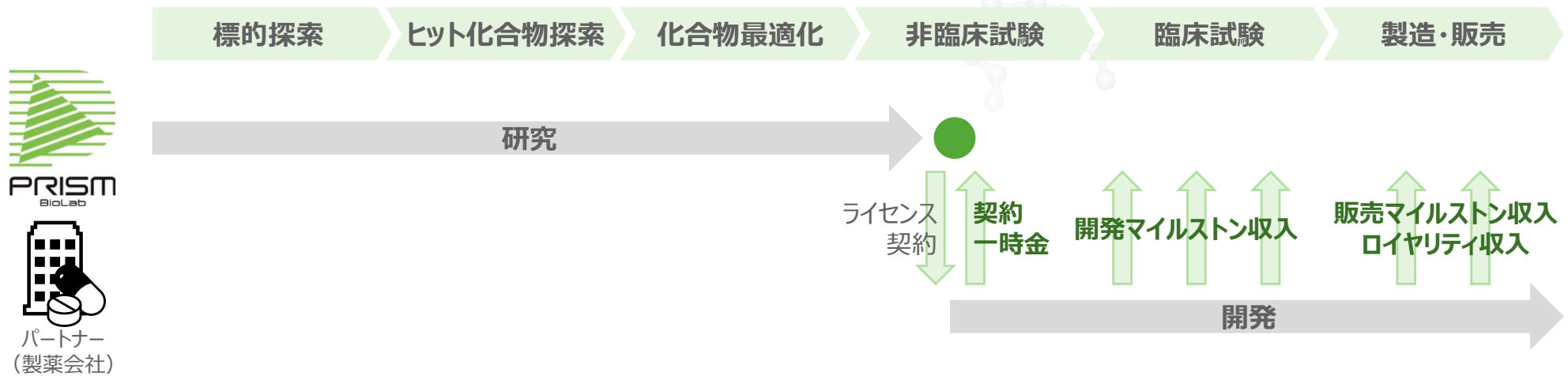
06 2026年9月期 中間会計期間 業績ハイライト

PP I 創薬を推進するビジネスモデル

PP I 創薬技術を基にした、自社開発事業と共同開発事業のハイブリッドモデル

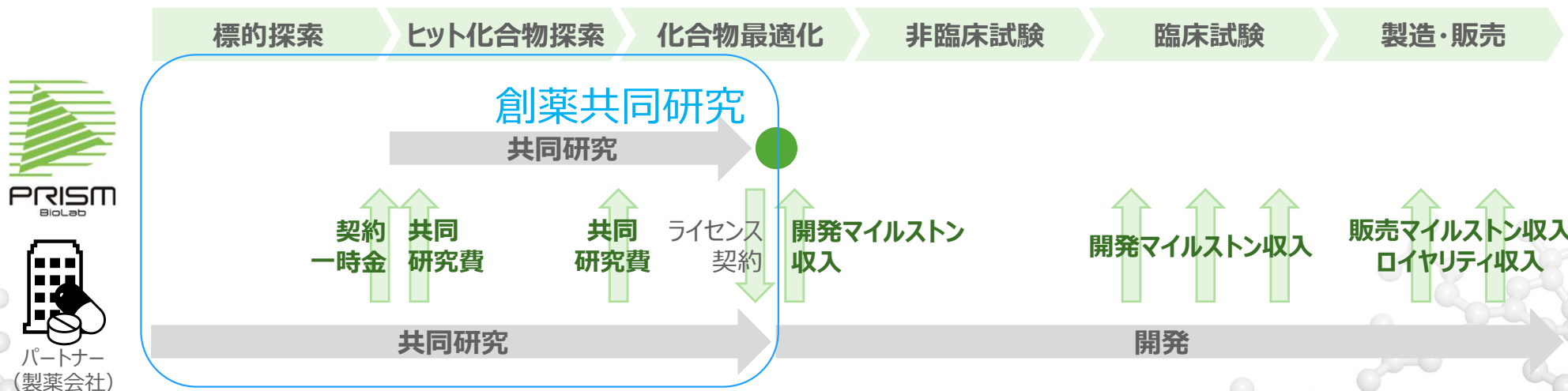
自社開発事業

自社で創薬標的を選定し臨床化合物を開発してライセンス



共同開発事業

パートナー（製薬会社）の創薬標的に対し、PepMetricsを活用して臨床化合物を探索してライセンス



共同開発事業：創薬共同研究

グローバル企業4社と共同研究及びライセンス契約を締結

提携先	契約締結年月	経済条件	契約内容及び進捗状況
	2024年4月	・ 非開示	<ul style="list-style-type: none">小野薬品工業のガン領域の創薬標的に対する開発候補化合物を共同開発。小野薬品工業は臨床開発ならびに商業化の権利を得る。
  <small>A Member of the Roche Group</small>	2021年12月	・ 非開示	<ul style="list-style-type: none">三社間契約。Roche及びGenentechの創薬標的に対するヒット化合物のスクリーニングのためにPepMeticsライブラリーを提供。ヒットした化合物に対してライセンス許諾。
	2020年10月	・ 非開示	<ul style="list-style-type: none">Merckの創薬標的に対するヒット化合物のスクリーニングのためにPepMeticsライブラリーを提供。ヒットした化合物に対してライセンス許諾。

01 会社紹介・ビジネスモデル

02 P R I S Mの基盤技術「PepMetrics®テクノロジー」

03 進捗する臨床パイプライン

04 グローバル企業との共同研究

05 P P I創薬を加速する2つの戦略

06 2026年9月期 中間会計期間 業績ハイライト

PP I 創薬を加速する2つの戦略

ヒット創出 プログラム

年間10のHTSを実施

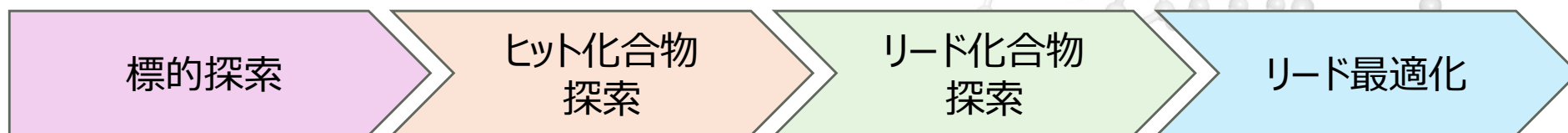
ヒット化合物を基に
共同研究を進める

創薬バイオテックと 共同開発

シナジーのある技術で新たな
標的とHitを創出

PP I 創薬に有効な技術
をPRISM中心に集約

ヒット創出プログラムの進捗



「ヒット創出プログラム」

PepMetics®ライブラリーを用いたハイスループットスクリーニング（HTS）により、創薬の起点となるヒット化合物を次々と創出する「創薬エンジン」



自社開発パイプラインの拡充
ライセンス機会の創出

■ 目標

年間10プログラム規模で
HTSを実施



■ 実績（2026年6月13日時点）

- 2025年度下半期：2プログラム開始
- 2026年度上半期：5プログラム開始
- 4つのヒット化合物を取得

あらたな創薬コンセプトで標的を選定

従来の P P I 創薬に加え、既に確立された大きな市場であらたな市場を作り出す。

PepMetrics®による「あたらしい創薬標的群」への展開

PepMetrics®は、新規 P P I 市場を開拓する技術であると同時に、既存大市場で未解決課題を解くプラットフォームでもある

PRISMの基本戦略 PepMetrics®による P P I 制御

- 「創薬困難」とされた P P I を標的
- 将来的市場ポテンシャルは極めて大きい

【短期的な課題】

- 新しい創薬分野で難易度が高い
- 開発に時間を要する
- パートナー企業も慎重



あたらなる展開

巨大市場を持つ既存創薬標的群へ展開

例：キナーゼ / 膜タンパク質

PepMetrics®を用いて
従来法では解決困難だった課題を解決

→ 新たな市場・治療機会の創出

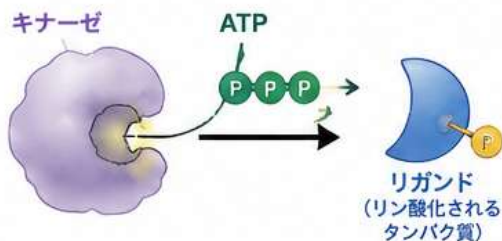
	P P I	キナーゼ	膜タンパク質
体内の種類	タンパク質：20,000種類 PPI：650,000種類※1	> 500種類 (Including Pseudo)	約5,000種類 (ヒトタンパク質の約25%)
対象医薬品数	1 ※2	72 ※3 (2022年11月時点)	約700以上 ※5 (既承認薬の約50~60%が 膜タンパク質標的)
現在の市場規模	16億米ドル ※2 (2023年)	476億米ドル ※4 (2020年)	数千億米ドル規模 ※5 (創薬ターゲットとして最大領域)

あらたな展開：P P I を標的にする次世代キナーゼ阻害剤

1 キナーゼ阻害剤は巨大市場を形成。しかし未解決課題が存在

キナーゼ阻害剤は確立された創薬分野で、70品目以上が承認。2030年に約8兆円市場*と予測

キナーゼとは



ATPが結合し、リン酸（P）を特定のタンパク質（リガンド）に転移（リン酸化）し、その動きをコントロールする

多くのキナーゼ阻害剤は「同じ鍵穴（ATPポケット）」を狙う



約400種類以上のキナーゼがよく似た“鍵穴（ATPポケット）”を持っている

従来のATPポケットを狙う創薬の課題

課題①：選択性の低さ（副作用の原因）
鍵穴の形が非常によく似ているため、狙ったキナーゼ以外にも薬が結合してしまう。

他のキナーゼにも結合 → 副作用のリスク

課題②：薬剤耐性の発生
ATPポケットの一部に変異が起こると、薬が結合できなくなり、効果が失われる。

薬が効く状態 → 変異が起きた状態

遺伝子変異により薬が効かなくなる

2 PRISMは「キナーゼを動かすスイッチ部分」を狙う

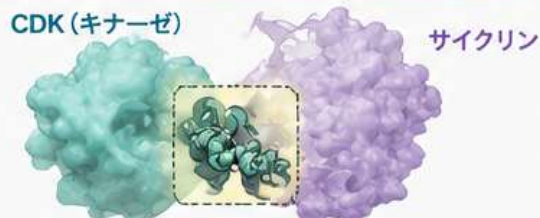
CDK：サイクリン依存性キナーゼ サイクリンが結合することで役割を果たすキナーゼ

従来の阻害剤：ATPポケットを阻害



多くのキナーゼで似ているため、選択性や耐性の課題がある

PRISMのアプローチ：スイッチ部分を阻害



CDKとサイクリンの結合インターフェース（キナーゼを活性化する“スイッチ部分”）を阻害

本アプローチのメリット

- 高い選択性
CDK-サイクリンの結合部位はユニークで類似性が低く、選択性を出しやすい
- 薬剤耐性の回避が期待できる
ATPポケットの変異の影響を受けにくく、耐性が起こりにくい可能性
- 新しい作用機序
既存薬とは異なるメカニズムで、新たな治療選択肢を提供

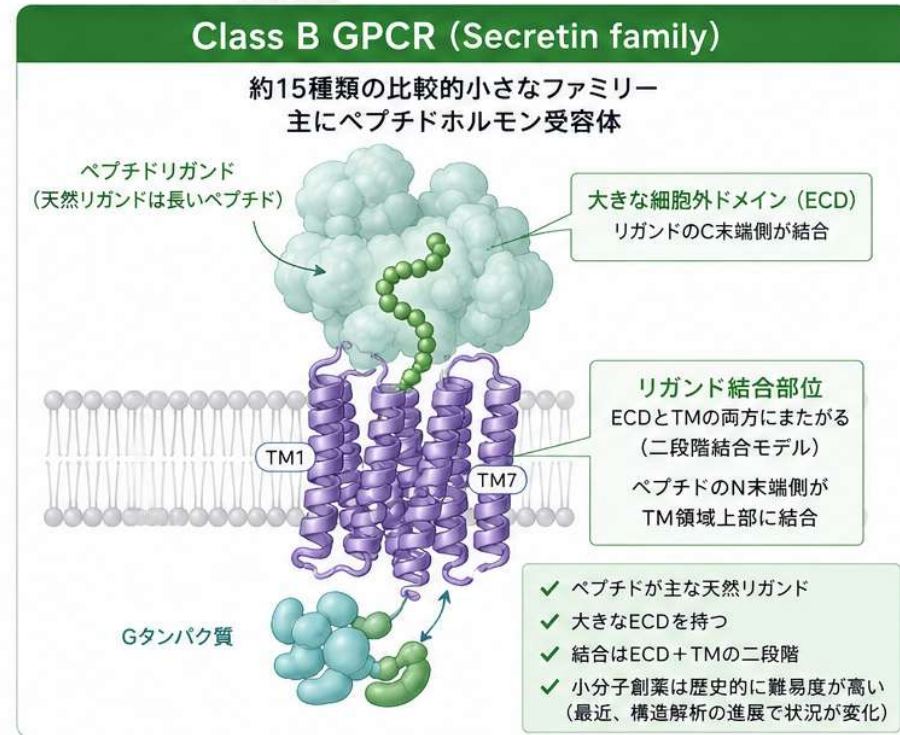
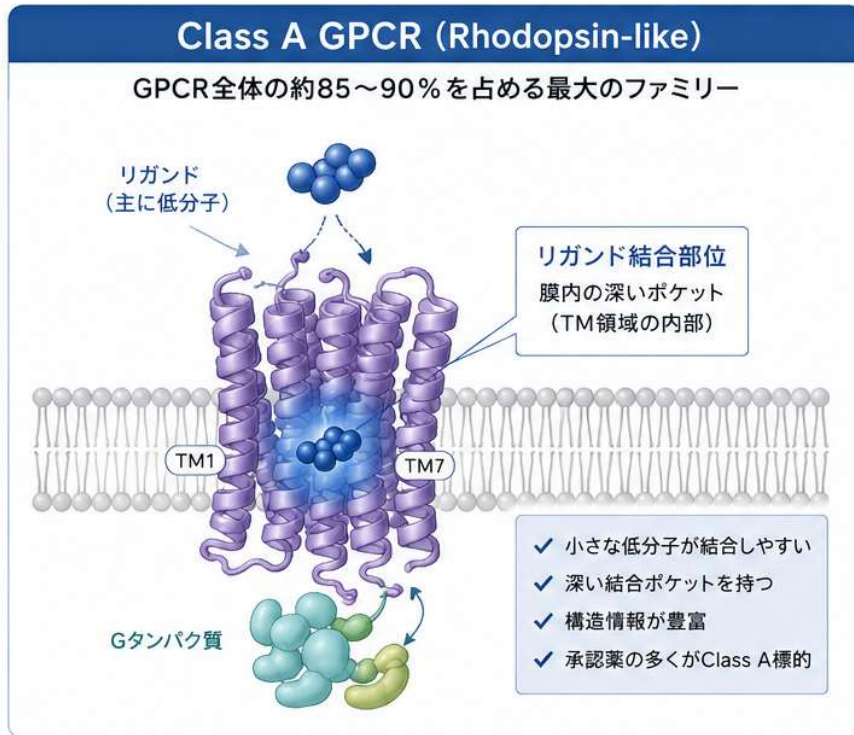
ヒット化合物を創出

- ATPとの非競合を確認
- キナーゼ阻害活性を確認
- 複数のCDKに対して選択性のあるヒットを創出

あらたな展開：GPCR Class B を標的とする低分子医薬品

Class Aは低分子医薬品が多いが、Class Bは困難とされてきた

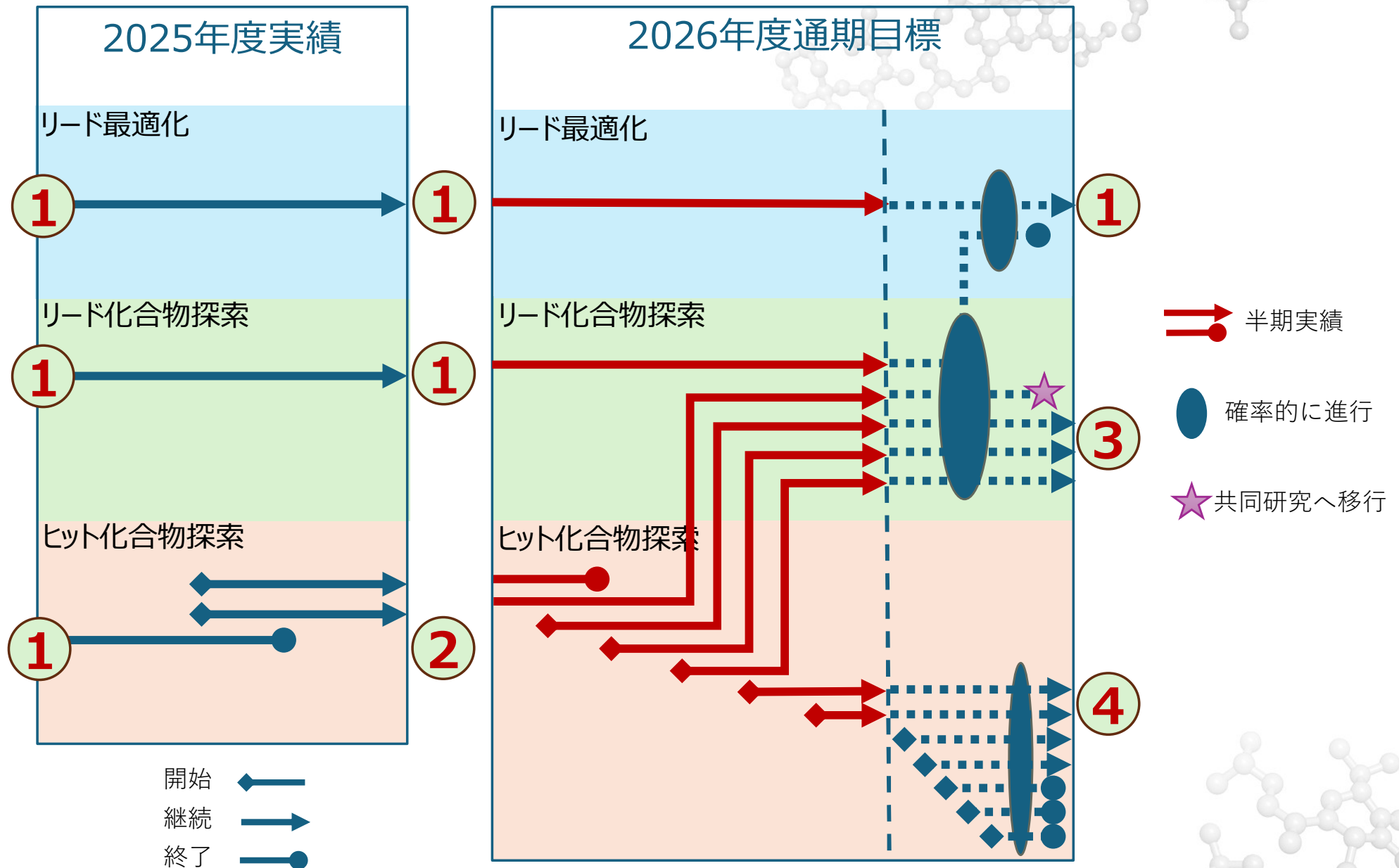
Class Aは元々低分子が結合するポケット。Class Bはペプチドが結合するポケットで、主にペプチド医薬品が承認されている



項目	Class A GPCR	Class B GPCR
代表的な受容体	β_2 アドレナリン受容体、ドーパミンD ₂ 受容体、ヒスタミンH1受容体 など	GLP-1受容体、GLP-2受容体、GIP受容体、PTH1受容体、CRF受容体 など
構造の特徴	7回膜貫通 (7TM) のみ	大きな細胞外ドメイン (ECD) + 7回膜貫通 (7TM)
リガンドの種類	主に低分子 (内因性リガンドは小さなアミンやペプチドなど様々)	主に長鎖ペプチドホルモン (20~40アミノ酸程度)
リガンド結合部位	TM領域の深いポケット (膜内深部)	ECDとTM上部の両方 (二段階結合モデル)
創薬のしやすさ	比較的容易 (深いポケットに小分子が結合しやすい)	歴史的に難しい (ペプチド依存性が高く、ポケットが浅い)
承認薬の状況	多数 (GPCR承認薬の大部分がClass A標的)	限定的 (近年、小分子アゴニストの開発が進展)

まとめ： Class A は「深いポケットに小分子が結合する」タイプ、 Class B は「ペプチドがECDとTMにまたがって結合する」タイプ

プログラムの進捗：自社開発（期首設定目標と進捗状況）



PP I 創薬を加速する2つの戦略

ヒット創出 プログラム

年間10のHTSを実施



ヒット化合物を基に
共同研究を進める

創薬バイオテックと 共同開発

シナジーのある技術で新たな
標的とHitを創出

PP I 創薬に有効な技術
をPRISM中心に集約

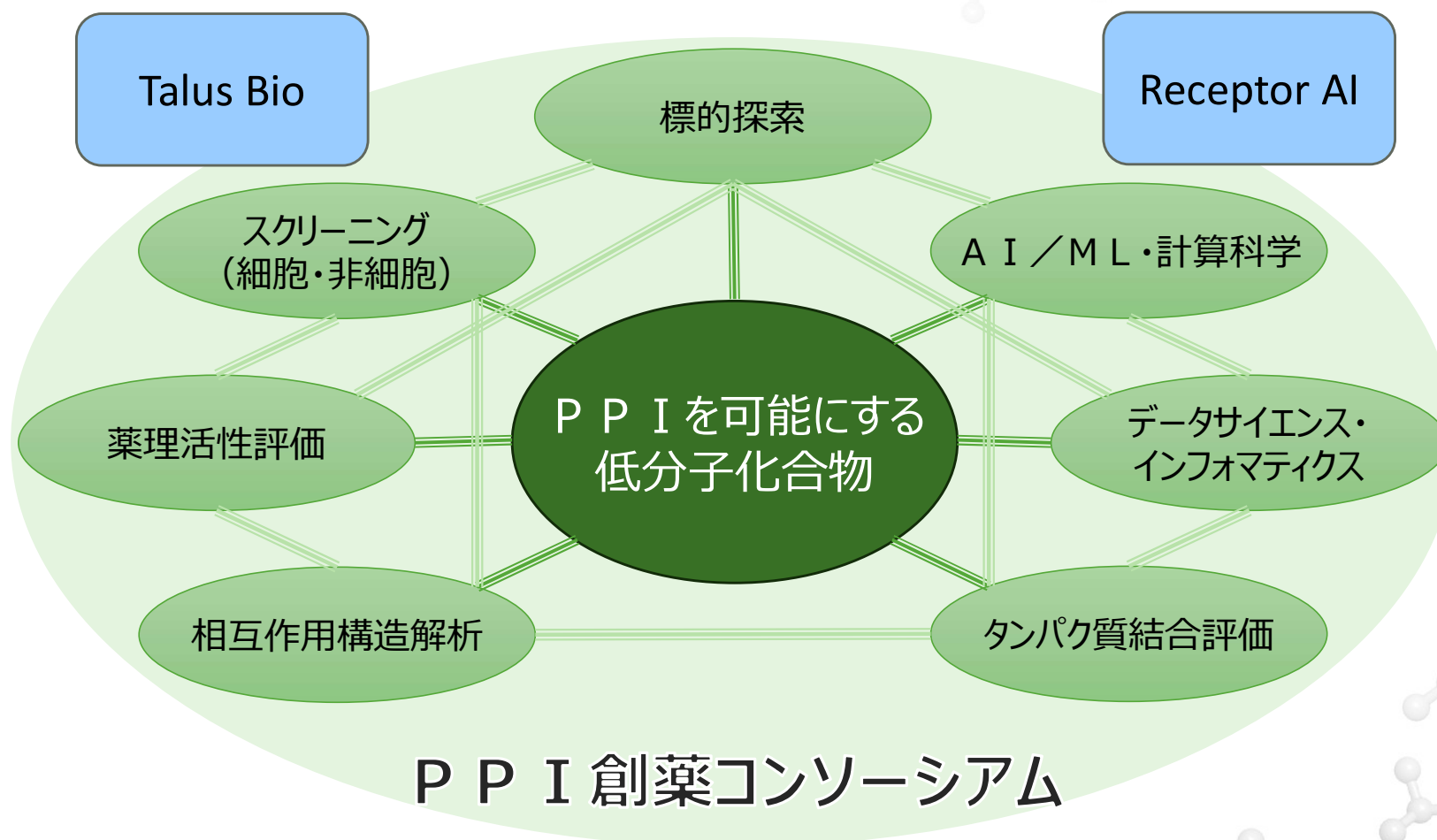
創薬バイオテックと共同開発

提携先	契約締結年月	提携内容	特徴	ポイント
 Talus Bio	2025年12月	転写因子および P P I 標的に対する新規阻害剤の探索	プロテオミクスを基盤とし、転写因子などの創薬困難な標的に対する創薬を推進するバイオベンチャー	「どこを狙うか」 標的側に強み
 RECEPTOR.AI	2026年 3月	P P I 標的および膜タンパク質を創薬標的の対象とした新規低分子医薬品の探索 製薬企業との共同研究機会の開拓	多目的AIナビゲーションエンジンを活用し、低分子化合物の設計・最適化を行うテックバイオ企業	「どう作るか」 化合物設計に強み

PRISMのPepMetics®技術を活かした外部パートナーとの連携により、
標的選定から化合物設計までを統合した創薬基盤を構築

PP I 創薬コンソーシアム構想を始動

- ◎ PP I 創薬を促進する卓越した技術を持つベンチャーと連携
- ◎ 各社の技術を融合させ、PP I 創薬の飛躍的進展を目指す



01 会社紹介・ビジネスモデル

02 P R I S Mの基盤技術「PepMetrics®テクノロジー」

03 進捗する臨床パイプライン

04 グローバル企業との共同研究

05 P P I創薬を加速する2つの戦略

06 2026年9月期 中間会計期間 業績ハイライト

2026年9月期 中間会計期間 損益状況

単位：百万円

科目名	2024年 9月期	2025年 9月期	2025年 9月期 中間会計期間	2026年 9月期 中間会計期間	増減
売上高	305	677	218	253	+35
売上総利益	160	269	51	81	+30
販売費及び 一般管理費	942	1,044	512	666	+154
営業損失	△782	△774	△460	△584	△124
営業外収益	—	26	28	25	△3
営業外費用	49	0	0	0	0
経常損失	△831	△748	△432	△560	△128
特別損失	216	82	40	41	+1
当期純損失	△1,049	△833	△474	△603	△129

2026年9月期 中間会計期間 財政状況

単位：百万円

科目名	2024年 9月期	2025年 9月期末	2026年 9月期 中間会計期間	増減
流動資産	4,483	3,038	2,540	△498
うち現金及び預金	4,392	2,915	2,454	△461
固定資産	45	46	45	△1
資産合計	<u>4,528</u>	<u>3,085</u>	<u>2,586</u>	<u>△499</u>
流動負債	1,019	370	449	+79
うち契約負債	900	236	300	+64
固定負債	5	6	6	0
負債合計	<u>1,025</u>	<u>376</u>	<u>456</u>	<u>80</u>
純資産合計	<u>3,502</u>	<u>2,708</u>	<u>2,129</u>	<u>△579</u>
負債純資産合計	<u>4,528</u>	<u>3,085</u>	<u>2,586</u>	<u>△499</u>

2026年9月期 中間会計期間 キャッシュフロー状況

単位：百万円

科目名	2024年 9月期	2025年 9月期	2025年 9月期 中間会計期間	2026年 9月期 中間会計期間	増減
営業活動によるキャッシュ・フロー	150	△ 1,468	△ 696	△ 462	+ 234
税引前中間純損失	△ 1,048	△ 831	△ 473	△ 602	△ 129
契約負債の増減額(△は減少)	886	△ 663	△ 183	63	+ 246
減損損失	216	82	40	41	+ 1
その他	94	△ 56	△ 80	36	+ 116
投資活動によるキャッシュ・フロー	△ 244	△ 69	△ 18	△ 1,535	△ 1,517
財務活動によるキャッシュ・フロー	3,370	33	29	17	△ 12
現金及び現金同等物に係る換算差額	△ 17	27	30	19	△ 11
現金及び現金同等物の増減額	3,258	△ 1,476	△ 655	△ 1,961	△ 1,306
現金及び現金同等物の期首残高	1,133	4,392	4,392	2,915	△ 1,477
現金及び現金同等物の中間期末残高	4,392	2,915	3,736	954	△ 2,782



ありがとうございました



PRISM
BioLab